本荘･由利のことばの特徴

1　本荘・由利のことばと歴史・風土

東北地方の方言は、大きく北奥羽方言（青森県・岩手県中北部・秋田県・山形県庄内地方および新潟県北部の方言）と南奥羽方言（岩手県南部・山形県内陸部・宮城県・福島県の方言）に分けられる。一方、ここから、秋田県本荘・由利地方、山形県庄内地方、新潟県北部地方を一括し、「由利庄内北越方言圏」を特立する見方もある（北条 1975）。この見方が示すように、本荘・由利地方の方言は、南に隣接する山形県庄内地方の方言と共通する性質を多数備えており、秋田県の他の地域とは一線を画する独自の位置づけを持つ。

こうしたことばの地域差が生じた理由は、近世までの本荘・由利地方の歴史によって説明できる。

鎌倉期から戦国末期の本荘・由利地方には、由利十二頭と呼ばれる小勢力が分立していた。関ヶ原の戦いの後、功のあった山形の最上氏にこの地方が与えられるが、その支配は約二十年間で終わる。その後、この地方は、亀田藩、本荘藩、矢島藩、仁賀保領、幕府領に分かれ、幕末を迎えた。

近世の藩領制において、秋田県の大部分が秋田（佐竹）藩であったのに対し、本荘・由利地方が諸藩・諸氏領に分かれていたことは、この地方のことばの地域差にも反映するところとなっている。すなわち、秋田県内をことばの地域差によって区画すると、南部藩に属していた鹿角地方と共に、本荘・由利地方が特立される。

秋田県の方言区画

- 北部方言
  - 鹿角方言…鹿角
  - 県北方言…大館・北秋田、能代・山本
- 中央方言……男鹿・南秋田、秋田・河辺
- 南部方言
  - 由利方言…本荘・由利
  - 県南方言…大曲・仙北、横手・平鹿、湯沢・雄勝

また、本荘・由利地方内部は、大きく次の三地域が、ことばの違いによって区分される。

本荘・由利地方の方言区画

- 由利北部方言……岩城町・大内町・本荘市北部
- 由利海岸南部方言…本荘市南部・由利町・西目町・仁賀保町・金浦町・象潟町
- 由利山間部方言……東由利町・矢島町・鳥海町

さらに、亀田藩、本荘藩、矢島藩において、武家の居住地域であった藩の中心地（岩城町亀田地区、本荘市市街地、矢島町城内地区）には、独特の武家ことば（御家中ことば・内町ことば）が行われていた。（ただし、現在は、かなりの高齢者の中にわずかに記憶されている程度で、その実態を知ることは難しい。）

一方、鳥海町のいわゆる「鳥海マタギ（猟師）」の用いる山ことば、沿岸部の漁師ことばなどは、生業、風土がことばの違いを生む要因になったものである。

このように、本荘・由利地方のことばの地域差は、この地方の歴史と風土に深く結びついて今日に至っている。

2　本荘・由利のことばの概観

（1）音韻

本荘・由利方言の音韻の特徴について、概略を示す。

①母音単独の「い」と「え」が区別されず、「え」のやや「い」がかった中間的な音で発音される。

②イ列音とウ列音の母音の区別があいまいで、特に「し／す」「ち／つ」「じ／ず」が混同される。

③連母音 /ai/・/ae/ が融合して「え」と「あ」の中間的な音で発音されることがある。本稿の仮名表記では、エ列音に小字体の「ぁ」を付して示す。「かい」「かえ」は「けぁ」、「さい」「さえ」は「せぁ」となる。他の行も同様。

例…貝（けぁ(ー)）、帰る（けぁ(ー)る）、読まない（読まねぁ(ー)）

※(ー)は長音の部分が短呼化する傾向があることを示す

連母音の融合音であるエァ列音は、エ列音で発音される場合がある。「読まない」は「読まねぁ(ー)」とも「読まね(ー)」とも発音される。エ列音の発音の方が新しい発音で、比較的、町部あるいは若い世代に見られる。

④語中・語尾のカ行音・タ行音が濁音化する。

例…柿（かぎ）、旗（はだ）

⑤語中・語尾の濁音が鼻濁音である。

例…鍵（かき゚）、肌（はんだ）、水（みんず）、帯（おんび）

④⑤の特徴により、濁音には二つの種類（非鼻濁音と鼻濁音）があることになるが、本稿では表記の上でこの二つを区別せず、いずれも濁点を付けて表す。すなわち、「柿」も「鍵」も「かぎ」、「旗」も「肌」も「はだ」と表記する。

⑥「せ」「ぜ」が「しぇ」「じぇ」と発音される。

例…背中（しぇなが）、汗（あしぇ）、銭（じぇに）

⑦「くゎ」「ぐゎ」の発音がある。

例…火事（くゎじ）、元旦（ぐゎんたん）

⑧ハ行音の「は」「ひ」「へ」「ほ」が、「ふぁ」「ふぃ」「ふぇ」「ふぉ」と発音されることがある。

⑥⑦⑧の発音は、かつては日本の中央語にも存在していた発音であり、古音が方言に残ったものである。本荘・由利方言では、⑥の発音は現在でも見られるが、⑦⑧の発音は現在はほとんど残っていない。

⑨特殊音（撥音「ん」・促音「っ」・長音「ー」）が短く発音される。

（2）語彙―本荘・由利方言に特有の語

本荘・由利地方は、北は秋田市、東は秋田県南部の内陸地方、南は山形県庄内地方と接する。ことばの特徴としても、これらの周辺地域の方言の特徴を多く共有しているが、一方で、こうした周囲の方言には見られない、本荘・由利方言に特有の語には、次のようなものがある。

かぎっこやんぱ（引き鈎遊び・指切りげんまん）・かげ（子供を背負う帯）・きどり（木こり）・ごじぇ（くすぐったい）・ごじゃごじゃする（くすぐる）・こだじ（夕立）・じゃべ・じゃんべ（女に対する蔑称）・じろごたろご・たろご・たろげ・たらご・たるぎ（つらら）・ちょごまんこ（肩車）・ちらす（失敗する）・てでこ（小僧）・ながぐり（兄弟の中程に生まれた子）・なめ（つば）・なりごげ（馬鹿）・はなかっぽ（臭覚が無くなること）・ほだらんこ（ホタル）・やちかんする（失敗する）・やまよど（山稼ぎ連中）

※秋田県内の方言を収録した『秋田のことば』（秋田県教育委員会編、無明舎出版）により、本荘・由利地方のみで使用が確認された語のうち、全国方言を対象にした方言辞典『日本方言大辞典』（小学館）に未収録、もしくは本荘・由利地方以外では用いられていないもの、および『日本言語地図（全六巻）』（国立国語研究所編、大蔵省印刷局）において、本荘・由利地方のみに分布する語の中から抜粋した。

この他、「お手玉」の意味の「えんこち・えこし・えっこし」（矢島町・鳥海町）、「かけっこ」の意味の「さらぼっけ」（本荘市市街地）、昔話の終わりのことば「とっぴんからり（かたり）のさんしょのみ」（本荘・由利地方のほぼ全域）もこの地方に特有の表現である。

（3）文法―述語表現を中心に

ここでは、本荘・由利方言を含む秋田方言に一般的に見られる文法の特徴（特に述語の表現）を概観する。（本荘・由利方言特有の文法現象については次節を参照。）

【動詞述語】

動詞を次のように分類し、その活用表を示す。

五段動詞：「書く」「飲む」「乗る」「買う」など。

一段動詞：「見る」「寝る」など。

カ変動詞：「来る」とその複合動詞。

サ変動詞：「する」とその複合動詞。

本荘・由利方言の動詞の活用表

		言い切る形			続く形		
動詞		終止･連体形	命令形	意向形	未然形	連用形［音便形］	仮定形
五段	書く	かぐ	かげ	かご(ー)	かが-	かぎ-　［かい-］	かげ-
	飲む	のむ	のめ	のも(ー)	のま-	のみ-　［のん-］	のめ-
	乗る	のる	のれ	のろ(ー)	のら-	のり-　［のっ-］	のれ-
	買う	かう	かえ	かお(ー)	かわ-	かい-　［かっ-］	かえ-
一段	見る	みる	みれ	みろ(ー)	み-	み-	みれ-
	寝る	ねる	ねれ	ねろ(ー)	ね-	ね-	ねれ-
カ変	来る	くる	こえ･け	ころ(ー)	こ-	き-	こえ-･け-
サ変	する	する す	しぇ	すろ(ー) そ(ー)	さ-	し-	しぇ-
続く助詞･助動詞など(主なもの)					ねぁ(否定) (ら)れる(受身)	て(中止) た(過去)	ば(仮定)

※意向形の(ー)は長音の部分が短呼化する傾向があることを示す。

〈終止・連体形〉 文末で言い切ったり、名詞を修飾するときの形。なお、サ変動詞には「する」「す」の二つの形がある。

・庭掃除なば、おれ｛する／す｝。（庭掃除は私がする。）

・何が｛する／す｝ごどねぁが。（何かすることないか。）

〈命令形〉 一段動詞の命令形は「見れ」「寝れ」のように「～れ」の形になる。ラ行五段動詞（「乗る」「取る」など）の命令形が「～れ」になることに類推して生じた形である。カ変動詞「来る」の命令形には「こえ」を使う地域と、「け」を使う地域がある。「こえ」は岩城町・大内町・本荘市北部・東由利町・象潟町で多く用いられ、「け」は本荘市南部・由利町・矢島町・西目町・仁賀保町・金浦町で多く用いられる。「け」は「こえ」の縮約した語形である。サ変動詞「する（す）」の命令形は「しぇ」である。

〈意向形〉 本荘・由利方言の場合、一段・カ変・サ変動詞で、「みろ（ー）」「ねろ（ー）」「ころ（ー）」「すろ（ー）」など、ラ行五段動詞に類推して生じたと考えられる形が用いられている。なお、本荘・由利方言には、反語を表す終助詞「ばや」があるが、これは「えごばや（行くものか）」「みろばや（見るものか）」のように、意向形に後接する。

〈未然形〉 次のような接辞を伴って用いられる。

①「ねぁ」（否定）：「のらねぁ」「みねぁ」「こねぁ」「さねぁ」など。サ変動詞の「さねぁ」は五段動詞化した形。「ねぁ」自体は、基本的に形容詞型の活用をする。

②「しぇる・さしぇる」（使役）：「のらしぇる」「みさしぇる」「こさしぇる」「さしぇる」など。なお、一段・カ変動詞は、五段動詞化して「みらしぇる」「こらしぇる」となる場合がある。「しぇる・さしぇる」自体は、一段動詞型の活用をする。

③「れる・られる」（受身・可能）：「のられる」「みられる」「こられる」「される」など。語尾の「れ」の［ｒ］が脱落した「のらえる」「みらえる」「こらえる」「さえる」が用いられることが多い。「れる・られる」自体は、一段動詞型の活用をする。

④「る・らる」（自発）：「のらる」「みらる」「こらる」「さる」など。「る・らる」自体は、五段動詞型の活用をする。

・このペン、スラスラ<u>書がる</u>。（このペンはスラスラと書ける。）

・このペン、<u>書がらね</u>。（このペンは書けない。）

〈連用形〉 連用中止節をなす以外に次のような語尾を伴って用いられる。

①「てぁ」（願望）：「のりでぁ」「みでぁ」「きてぁ」「してぁ」など。「てぁ」自体は、形容詞型の活用をする。

②「て」：「のって」「みで」「きて」「して」など。

③「た」：「のった」「みだ」「きた」「した」など。

「て」「た」を後接する場合、五段動詞では音便形を用いる。

〈仮定形〉 語尾に「ば」を伴って、仮定条件節をなす形。カ変動詞のバ形は、「こえば」と「けば」が併用される。サ変動詞のバ形は「しぇば（せば、へば）」となる。

【形容詞述語】

共通語の形容詞は、「暗い」「優しい」「安い」「白い」など、イ語尾で終わるが、本荘・由利方言の形容詞は、語尾と前接母音とが融合した形が終止・連体形となる。すなわち、「暗い」であれば「くれぁ（ー）」、「優しい」であれば「やさし（ー）」、「安い」であれば「やし（ー）」、「白い」

であれば「しれ（ー）」となる。この終止・連体形はこのままの形で語幹となり、さまざまな語尾を後接する。

〈終止・連体形〉 くれぁ（暗い）

・外、くれぁ。（外が暗い。）

・くれぁどごで本読むな。（暗い所で本を読むな。）

〈連用形〉 くれぁぐ（暗く）

・すっかり、くれぁぐなった。（すっかり暗くなった。）

〈テ形〉 くれぁくて（暗くて）

・夜道くれぁくて、おっかねぁ。（夜道が暗くて怖い。）

〈タ形〉 くれぁがった（暗かった）

・夜道くれぁがった。（夜道が暗かった。）

〈バ形〉 くれぁば（暗ければ）

・くれぁば電気つけれ。（暗ければ電気をつけろ。）

「ば」を後接する場合、終止・連体形に直接「ば」が続く。**〈否定〉**はク語尾に「ねぁ」を後接して「くれぁぐねぁ（暗くない）」となる。

【形容動詞述語】

秋田方言では、一般的に、形容動詞が名詞を修飾する場合、「～だ」の形が用いられる。「静かな部屋」であれば「静がだ部屋」となる。一方、本荘・由利方言では、連体語尾として「～だ」とともに「～な」を用いる傾向がある。名詞修飾の場合に「～な」を用いるだけでなく、バ形でも「～だば」とともに「～なば」を用いる。

〈終止形〉 静がだ（静かだ）

・この部屋なば静がだ。（この部屋は静かだ。）

〈連体形〉 静がだ／静がな

・{静がだ／静がな} 部屋さ行ご。（静かな部屋へ行こう。）

〈連用形〉 静がに（静かに）

〈テ形〉 静がで（静かで）

〈タ形〉 静がであった／静がだった（静かだった）

〈バ形〉 静がだば／静がなば（静かなら）

〈否定〉はテ形に「ねぁ」を後接して「静がでねぁ（静かでない）」となる。

【名詞述語】

名詞述語の語尾となる指定辞（断定の助動詞）は、形容動詞の語尾にほぼ準ずる現象を持つ。まず、秋田方言に特徴的だと言えるのは、名詞を修飾する場合に、形容動詞と同様、「～だ」の形を用いることがある点である。「父親だ人（父親である人）」は指定辞の名詞修飾の例である。指定辞の語形変化については、次のようになる。

〈終止・連体形〉 父親だ

〈テ形〉 父親で

〈タ形〉 父親であった／父親だった

〈バ形〉 父親だば／父親なば

〈否定〉はテ形に「ねぁ」を後接して「父親でねぁ」となる。

（4）本荘・由利方言特有の文法現象

ここでは、本荘・由利地方の方言が、秋田県の他の地域の方言と異なり、山形県庄内地方の方言と特徴を同じくする文法現象として、推量の表現、意志の表現、反語の表現を見ていく。

【推量の表現】

東北地方の方言は全般的に、推量の表現に「べ（ぺ）」(「書ぐべ（書くだろう）」「起ぎるべ・起ぎっぺ（起きるだろう）」など）を用いる。一方、本荘・由利地方では、推量表現に「でろ」「がろ」(「書ぐでろ・書ぐがろ（書くだろう）」「起ぎるでろ・起ぎるがろ（起きるだろう）」など）が用いられる。「でろ」を用いるのは由利北部および由利沿岸南部、「がろ」を用いるのは由利山間部である。山形県庄内地方では「でろ」が用いられる。

ここで、「でろ」使用地域の本荘市と「がろ」使用地域の矢島町、鳥海町の推量表現の形式をまとめておく。

本荘市方言の推量表現

	現在推量	過去推量
動詞（書く）	書ぐでろ	書いだでろ
形容詞（寒い）	さびでろ	さびがったでろ
形容動詞（静かだ）	静がだでろ	静がであったでろ
名詞＋だ（雨だ）	雨だでろ	雨であったでろ

矢島町方言の推量表現

	現在推量	過去推量
動詞（書く）	書ぐがろ	書いだがろ
形容詞（寒い）	さびがろ	さびがったがろ
形容動詞（静かだ）	静がだがろ	静がであったがろ
名詞＋だ（雨だ）	雨だがろ	雨であったがろ

鳥海町方言の推量表現

	現在推量	過去推量
動詞（書く）	書ぐがろ	書いだろ
形容詞（寒い）	さびがろ	さびがったろ
形容動詞（静かだ）	静がだろ	静がであったろ
名詞＋だ（雨だ）	雨だろ	雨であったろ

本荘市方言の「でろ」と矢島町方言の「がろ」は、現在推量の場合、動詞、形容詞の終止形の後に続く。さらに、形容動詞、「名詞＋だ」の場合も、言切りの形（～だ）に続く。過去推量では、過去形（～た）の後に続く。

一方、鳥海町方言の「がろ」は、現在推量の場合の動詞、形容詞の終止形に続く場合に限って用いられる。形容動詞、「名詞＋だ」の場合は末尾の「だ」が「だろ」になり、過去推量の場合は、過去形の末尾の「た」が「たろ」になる。

このようにして見てみると、本荘市方言の「でろ」および矢島町方言の「がろ」は、鳥海町方言の「がろ」に比べて、推量辞としての独立的機能がより進んだ文法形式であることが分る。「がろ」は、動詞の終止形に続く用法を持つ点で本荘市方言の「でろ」、矢島町方言の「がろ」に準ずるが、鳥海町方言の推量表現全体を見ると、意味的に意志表現の分化を伴わない形容詞、形容動詞、「名詞＋だ」の現在推量および過去推量では、古典語の助動詞「む」に由来する、古い語形が維持されていると言える。

【意志の表現】

古典語の助動詞「む」が動詞に直接続く「書かむ」「見む」などの語形は、現代語では、意向形（ウ・ヨウ形）に継承されている。共通語の場合、「書こう」「見よう」などの語形がこれに当るが、これらが本荘・由利方言では、次のような語形になる。

・日記書ご。（日記を書こう。）
・テレビ見ろでぁ。（テレビを見ようよ。）
・そろそろ寝ろがな。（そろそろ寝ようかな。）
・一緒にころ。（一緒に来よう。）
・勉強｛すろ／そ｝。（勉強しよう。）

一段・カ変・サ変動詞で、「～よう」ではなく、「～ろ(ー)」の形になる点が、共通語とは異なる。

これらの語形は、秋田方言一般に見られるものであるが、一方で、秋田県の北部や中央部の方言では、意志の表現を終止形で表すことが多いため、実際には意向形が用いられる機会は少ない。それに対し、本荘・由利方言では、意向形の使用が相対的に定着しているように見受けられる。

【反語の表現】

意向形が定着していることと関連して、意向形に終助詞「ばや」を後接して反語を表す表現がある。「書ごばや」は「書くものか」、すなわち「書かない」の意味である。

・おれ、そんた手紙書ごばや。（私がそんな手紙を書くものか。）
・おめぁの日記なば、見ろばや。（おまえの日記なんか見るもんか。）
・まだ寝ろばや。（まだ寝るもんか。）
・あいず、ころばや。（あいつが来るもんか。）
・そんたごどそばや。（そんなことをするもんか。）

サ変動詞では「すろばや」も可能ではあるが、「そばや」の方が普通の表現のようである。

反語の「ばや」は、状態性の述語の意向形にも後接する。

・そんたごどあろばや。（そんなことがあるもんか。）
・まだ十月だど。さびぐあろばや。（まだ十月だぞ。寒くあろうものか。）
・あいつが静がであろばや。（あいつが静かであろうものか。）
・明日、雨であろばや。（明日が雨であろうものか。）

ただし、次のように、同じ助動詞「む」に由来する表現であっても、現在、推量辞として用いられている形式には後接しない。

・×まだ十月だど。さびでろばや。
・×あいつが静がだでろばや。
・×明日、雨だでろばや。

3　本荘ことばの会話例

ここでは、現在の本荘市町部のことばによる会話例を見る。（１）（２）は親しい者同士のくだけた会話、（３）はやや気を遣う相手に対する丁寧な会話である。会話の作成は、佐藤勵子氏（1934年、本荘市生まれ）の内省に基づいて行った。

（1）飲み会に誘う

A　とーさん、えだがー。（父さん、いるか。）

B　今えねぁくてよー、ちょっと出でったおのー。（今いなくてね、ちょっと出ていったのよ。）

A　どごさ行ったんでろなー。なんちころ帰（けぁ）ってくるんでろなー。（どこに行ったんだろうな。何時頃帰ってくるんだろうな。）

B　んだなー、散歩さ行ったがなー。買物さでも行ったやら。床屋さ男ぶり上げに行ったがもしれねぁなー。（そうだな、散歩に行ったかな。買物にでも行ったやら。床屋に男ぶりを上げに行ったかもしれないな。）

A　今日、飲みかだあるって言ったがったどもなー。(今日、飲み会があるって、言ったんだけどな。)

B　あらー、まんず、とーさん、忘れだどごだでろがー。そえんた約束なば、忘れねぁど思うはんて、先に行ってでけねぁがー。（あら、まあ、父さん、忘れたんだろうか。そういう約束なら忘れないと思うから、先に行っていてくれない？）

A　しぇば、わりども先に行ぐー。（じゃあ、悪いけど、先に行く。）

【語句の解説】

えだ…現在の存在を表す場合にも「いた」という過去形の表現を用いる。「えだが」は「いるか」の意味。

おの…終助詞。「もの」に由来するが、「～のよ」という意味合い。

でろ…推量辞。「だろう」に相当する。

なんちころ…何時頃。撥音（ン）の後の濁音が清音化したもの。

さ…移動の方向や存在場所などを表す格助詞。

飲みかだ…飲み会。

言ったがった…「動詞過去形＋がった」は、現在から切り離された過去の出来事について言う表現。「がった」は、形容詞の過去形語尾が動詞にも後接するようになったもの。「言ってあった」も同じ意味で用いられる。

ども…逆接の接続助詞。「けれども」に当たる。

まんず…「まあ」「本当に」といった軽い感嘆の意を表す。本荘・由利方言を含め、秋田方言では会話の端々に挿入される表現。

そえんた…そういう。そのような。「こういう」は「こえんた」、「ああいう」は「あえんた」と言う。

なば…「ならば」に由来する。「～なら」「～は」の意味合いで用いられる。

はんて…「ので」「から」に当たる原因・理由の接続助詞。

行ってでけねぁが…行っていてくれないか。「けねぁが」は「くれないか」。

しぇば…「では（じゃあ）」の意味合いの転換の接続詞として用いられる。「へば」「せば」とも言う。

（2）知り合いの家の初孫の誕生

A　〇〇さんの家(え)で、初孫さん、生まれだっけ。（〇〇さんの家で初孫が生まれたのよ。）

B　あら、えがったごと。赤ちゃんどご、見だが。（あら、よかったこと。赤ちゃんを見たの？）

A　はえ、きんの、見舞に行ったっきゃ、元気で泣(な)でだっけ。抱(だ)でみだば、おもでぁ赤ちゃんだっけ。（ええ、昨日、見舞に行ったら、元気に泣いていたわよ。抱いてみたら、重たい赤ちゃんだったわよ。）

B　んだがー。（そうなの。）

A　めんけ赤ちゃんだっけ。お母さん、きれーだはんて、あの赤ちゃんも、なんぼが、美人なるんでらー。（かわいい赤ちゃんだったわよ。お母さんがきれいだから、あの赤ちゃんもどんなにか美人になることやら。）

B　おばーさんも美人であったおんなー。あのおばーさんなば、私ださ、よぐ言葉かげでけるがったおんなー。（おばあさんも美人だったものね。あのおばあさんは、私たちによく声をかけてくれたものだったわね。）

A　んだがらー。（そうなのよね。）

B　私もちけぁうち、お見舞に行ぎでぁど思うども、一緒に行ってけらえねぁが。（私も近いうちに、お見舞に行きたいと思うけれども、一緒に行ってくれることはできない？）

A　んだなー、私も、お祝さねばねぁど思ってでよー、あれでらこれでら考えだども、何えーでろがなー。（そうね、私もお祝しなければならないと思っていてね、あれやこれや考えたんだけど、何がいいだろうな。）

B　んだなー、紙おむつ、一番えぐねぁがなー。（そうね、紙おむつが一番よくないかな。）

A　それ、えーなー。しぇば、明日一緒に行ご。（それ、いいわね。じゃあ、明日一緒に行こう。）

【語句の解説】

け…発話時以前に話し手自身が観察することによって認識した事態（その認識は観察以降に発生する事態の予測も含む）を述べる。

どご…目的語を表す格助詞。

行ったっきゃ・抱でみだば…「行ったら」「抱いてみたら」の意味。「たっきゃ」「たば」はともに、「～したら～した」という継起条件を表す接続表現。なお、「まま食ったら歯みがげ（ごはんを食べたら歯をみがけ）」のように、仮定条件を表す場合には「たら」が用いられ、「たっきゃ」「たば」は用いられない。

私だ…「私たち」の意味。「私がだ」とも言う。「（が）だ」は人の複数接辞。共通語の「がた（方）」とは異なり、目上・目下の区別なく用いる。

んでら…「のやら」「のだろうか」の意味。「でら」は「だやら」の縮約した表現。

かげでけるがった…「動詞現在形＋がった」は、過去における主体の習慣的、属性的、反復的な動きや変化を表す。「（よく）～したものだ」のような意味。「がった」は、形容詞の過去形語尾が動詞にも後接するようになったもの。

んだがら…「そうだね」「そうなんだよね」の意味の同意を表す表現。

行ってけらえねぁが…共通語に直訳すると「行ってくれられないか」。「ける（くれる）」の可能形の否定疑問文による依頼の表現である。

さねばねぁ…「しなければならない」の意味。地域によって、「さねまねぁ」「さねもねぁ」とも言う。

あれでらこれでら…「でら」は共通語の「やら」に当る。「あれやらこれやら」の意味。

（3）本を借りる

A　○○さん、えあんしたがー。（○○さん、いますか。）

B　あらー、久しぶりでがんしたー、元気でしたがー。（あら、久しぶりですね、元気でしたか。）

A　あのですよ、あんだ、『本荘・由利のことばっこ』ってゆう本、持ってだなでねぁがんすがー。まだ読みでぁぐなってですよー、図書館さ行っても、本屋探しても、見つからねぁくておんそ。（あのですね、あなたは『本荘・由利のことばっこ』っていう本を持っていたのでなかったですか。また読みたくなってですね、図書館に行っても、本屋を探しても見つからなくてですね。）

B　あー、あの本なば、あったはずだなー。今すぐ、探してみっから、ちょっと家(え)の中さ入(は)って、待ってでくんだはれ。（ああ、あの本ならあったはずだな、今すぐ探してみるから、ちょっと家の中に入って待っていてください。）

A　わりがんすなー、しぇば、ちょっと、おじゃましあんすー。（悪いですね、じゃあ、ちょっと、お邪魔します。）

B　どさやったなだでろなー。あ、見つかりあんしたー、この本でがんしょ。（どこにやったんだろうな。あ、見つかりました。この本でしょう。）

A　んでがんすー。なんともありがどがんした。しぇば、お借りしあんすー。（そうです。どうもありがとうございました。じゃあ、お借りします。）

B　まだ、ござってくんだはれ。お静がに。（またいらっしゃってください。さようなら。）

【語句の解説】

(し)あんす…「(し)ます」に当る丁寧語。

でがんす…「でござりあんす」の縮約した表現。「です」に当る丁寧語。

あのですよ…改まった丁寧な会話の中で、間投詞的に挿入される。

おんそ…「おんすよ」の縮約した表現。「おんす」は「です」に当る丁寧語。例：私も行ぎでぁなおんすよ（おんそ）。（私も行きたいのですよ。）あんだも行ぐなおんすが。（あなたも行くのですか。）

くんだはれ…「ください」の意味。

でがんしょ…「でしょう」「でございましょう」の意味。「でがんほ」とも言う。

お静がに…客を送り出すときや人と別れるときなどにかける挨拶のことば。

《参考文献》
秋田県教育委員会編（2000）『秋田のことば』無明舎出版
秋田県教育委員会編（2003）『ＣＤ-ＲＯＭ版秋田のことば』無明舎出版
国立国語研究所編（1966-74）『日本言語地図（全六巻）』大蔵省印刷局
佐藤勵子（1988）『本荘の話しことば』（自家版）
徳川宗賢監修・尚学図書編（1989）『日本方言大辞典（全三巻）』小学館
長澤亜希子（2001）「本荘・由利地方の方言」『秋田大学ことばの調査』第２集
日高水穂（2002）「秋田県由利郡鳥海町方言の談話資料と文法解説」真田信治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（１）』文部科学省特定領域研究（A）「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」成果報告書
北条忠雄（1975）「北海道と東北北部の方言」『方言と共通語』筑摩書房

（日高水穂）